

青山学報

AOYAMA GAKUHO

272

Summer 2020

青山学報
272

あおやま すびりっと

日本代表として挑む東京オリンピック
セーリング49erFX級(女子)東京オリンピック日本代表

山崎 アンナさん



AOYAMA GAKUHO SUMMER 2020

Pioneers

開拓者たち

オール青山の校友には、未踏の分野でさがげとなり道を切り拓いた方々が数多くいます。今回は海外で活躍される劉みちさんを紹介いたします。

劉みちさん

Ryu Michi

米国立サンゼルス生まれ。1981年3月青山学院大学法学部私法学科卒業。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校経営学部会計学科卒業。現在、IRS（アメリカ合衆国内閣歳入庁の Large Business & International, Internal Revenue Agent 米国公認会計士



現在のご職業について、ご紹介ください。

日本の国税庁にあたる IRS (Internal Revenue Service) にて、米国で Fortune 500 と呼ばれる多国籍企業の法人税の移転価格を

を終えた両親とともに日本に帰国しました。両親は、ともに英語が得意であったこともあり、発展途上国から日本に来る技術研修生のお世話をしておりました。私は、小さい頃から多くの外国人の方とお会いする機会があり、英語を頻繁に使う環境で育ちました。そのためビジネスで必要な英会話は、高校までで何となく出来るようになっていました。父には、「米国ビジネスでは、こういう場合はこういう風に」とうるさく言われたものです。留学した理由は、自分の意志というより、そういう環境で育てられたからです。留学後は、父が米国の大学で経営専攻でしたので、父が出られたなら私も、という軽い気持ちでビジネススクールを選び、私に何ができそうかなと考える、会計学を選びました。日本では法学部を卒業しましたから、日本で学んだ一般教養、経済学などは単位認定されましたが、専門の会計や経営の必修科目はすべて履修しました。ビジネススクールは肌に合っていないととても楽しかったです。就職活動では、時代が良かったこともあり、卒業時に大学の就職フェアに行っただけで、オファーがいろいろなところからありました。自分で選んだとい

うより、仕事をやってきた感じですが、私は米国籍がありましたので、最終的には公務員になることを選びました。好きなことをやっているうちに今の仕事に辿り着いたというところでは、

——お忙しい日々かと思いますが、一日はどのようなサイクルでしょうか。

日によってかなり違います。監査先に行く日は監査先でミーティングがあり、書類が出されそれを調査します。役所の会議に出席する日もありますし、在宅勤務ですと文献を読む日もあります。監査先からの書類や税法の書類は膨大ですから、毎日読むことに追われています。他には、地元以外のエリアの監査を担当することもあり、時々出張もします。また、年にかかなりの数の役所内外の税法セミナーに出席し学んでいます。仕事の20%以上は結局税法の勉強で、学生時代より勉強は大変です。

——苦勞される点や今直面されている課題などがあれば、差し支えのない範囲でお話してください。

追徴後、監査先は Appeal と呼ばれている不服申立て管轄部署に事案を持っていく場合が多いのですが、Appeal で折り合いがつかない場合は税務裁判所まで行く可能性もあり

はじめとする国際税法全般の監査を担当し、Senior Agent として後輩の指導および新人の育成にもあたっています。仕事は、会計上、税務上の数字やバックグラウンドをまとめる業務です。私の担当税法の解釈を IRS 付きの弁護士への支援を受けながら特定し、最終的に追徴がある場合、私が結論を出し、NOPA (Notice of Proposed Adjustment) と呼ばれる書類にまとめ、他の担当者にも含めた最終的な追徴の中に計上されて監査先に追徴されるという流れです。若い頃は FBI や司法省に関係する特別な監査も担当し、特別な賞をいただきました。米国のありとあらゆるビジネスノウハウを学びながら、いろいろな監査を経験し、現在に至っています。

現在のご職業に就かれた理由、動機などお聞かせください。

私は、両親が米国留学中にロサンゼルスで生まれ、1歳のとき、学業

ますので、責任は重大です。仕事に責任はついて回るものですが、その重圧を乗り越えて実績を出すことはいつも頭であり永遠の課題です。
——ご職業における今後の目標などがあればお願いいたします。

“Transfer of Knowledge”をするように上から言われていきます。“Transfer of Knowledge”とは、監査のノウハウや人間関係を含めた対応の仕方を後輩に指導していくことを指しています。この“Transfer of Knowledge”ができる人材であるかは、米国ビジネスの世界で評価される大きな部分だと思います。自分で遂行できるだけでなく、それを同僚や後輩と分かち合える人材であるかということが重要で、それが目標です。



同僚の方々とパーティー（前列左から2番目）

休日、余暇は何をされていますか。
娘が大きくなるまでは、学校行事、お稽古や誕生日パーティーなどで

てこまいでしたが、お陰様で、最近はやつくり過ぎています。週末に近所のファーマーズマーケットに連れての卵、野菜、果物を買に行ける、それがかなり幸せです。近郊の農家から来るものは、スーパーマーケットで買うものとは美味しさが違います。あとは動物が好きで、7歳になる愛犬をお散歩やドッグパークに連れて行きます。自宅のそばの自然の中を愛犬と歩きながらとても癒されています。

——本学での授業、学生生活を思い出に残ることは何でしょうか。また、心に残る先生はいらっしゃいますか。

青山学院大学では法学部で、佐藤節子教授（故人）の法哲学のゼミに所属しました。高校時代、知人に法哲学の本を借り、法の解釈と創造の接点に何となく興味を覚えたからです。佐藤教授には、監査の仕事に就いてから、まだ幼かった娘を連れて帰国した際に何度かお会いし、随分励ましていただきました。佐藤教授は、確か一橋大学の法学部を女性で初めて卒業された方とゼミの先輩たちから伺いました。先駆者として道を切り拓かれた佐藤教授には、いつも心のどこかで支えられてきたよう

に思います。

また、ゼミ対抗のソフトボール大会で、何度か試合に出させていただきましたので、女子がメンバーに入ることのできる2、3点のハンデキャップを貰えるルールだったために誘われました。バッターボックスで、バースと打って……。最高に嬉しかったのを覚えています。今考えると、わざと私に打たせてくれたとわかるのですが、当時の私は、自分の実力で打っていると思っており、かなり単純な女子大生でしたね。



佐藤節子ゼミの仲間と（前列左端）



法学部の友人と（前列左端）

私は洗礼は受けませんでした。子供の頃メソジストの教会に通っておりまして。そのため、必修だったキリスト教概論の講義が大好きでした。私のキリスト教の知識

は、キリスト教が社会に深く根付いている米国のビジネスの世界で生きていくのにとっても役立っている気がしています。

青山学院大学は楽しくて、卒業するのがとても残念でした。心温まる思い出をたくさん作ることができ、感謝しています。

——本学会計プロフェッション研究科では、米国公認会計士の資格取得も教育目標のひとつに掲げていますが、会計士に必要な資質は何でしょうか。

一般的には、会計上は数字をみていけばいいと思われがちですが、実際のビジネスでは、監査先やチームメンバーとのコミュニケーションがとても大事です。それは、ビジネスの世界では情報をいただくことが出発点だからです。確実な情報がなければ、分析も何もありません。コミュニケーション力、交渉力が鍵だと思います。ただ、これはどの仕事でも同じかもしれませんね。
——在校生へのメッセージをお願いします。
これからの時代は私の時代よりさらに国際化が進むと思います。やはり国際社会で通用する人材となっていたいただきたいですね。応援しています。